頰杖小言

水野以文

○

私は繪を畫く場合、自分の癖で、其繪に納まるべく大體のはまりをとつた後、其主眼の一部分、例へば人體であつたならば、頭部、又風景であつたならば建築なり、樹木なりを、自分の出來る限り、確かに輪廓をとつて、それを標準にして他を畫いて行く樣にする。こんなやり方は、或は惡いかも知れぬが、私の性質として、一番適當であり、又やりよいからであるといふ迄で、別に主義でもなんでもない。

○

よく人が或任務が果さなかつた爲に遂隙がなかつたからといふ、書翰などにも多忙に打紛れてといふ文など大抵の場合を糊塗するのが多い、人間といふ者は元來非常に我儘な自分勝手な動物で、自分が横着から人に違約をして置きながら遂多忙であつたからといふ最も麗はしい言葉を以て其場を繕ふて平氣で何とも思つて居ない、勉强等も其通りで自分がやらないで居つて口では出來ない樣な事をいふのは全く出來ない場合もないでは無からうが、その多くは隙が無いのではなく自分から作らないのであると思ふ、私等も隙が無いといへば隨分いへない事もない朝六時に宿を出で夜十時半頃迄は夕餐の時一寸歸る許りで日中等殆んど在宿の折は無いのである、けれ共其内毎夜就寢前三十分なり一時間なりを讀書時間と定めて置けば少ないながらも十數日の間には五百餘頁位の書物は通讀する事が出來る、亦勤務時間の前後少しづゝの時間にても寫生をして居れば相當に描く事も出來るものである、斯くして少しづゝの時間を割いて毎日決行したならば一ヶ月の間には可成の仕事も出來るのである、それは人間である以上より機械的には出來ないのであるが平生其心持であつたならば或程度迄の隙は充分得らるゝのである、速記術發明者田鎖氏の歌に書けはかけ「書かねば書けじ書けよ人書けぬといふは書かぬなりけり」、といはれた誠に味ふべき至言であると思ふ。

太平洋畫會の光榮

美術奬勵の御趣意で宮内省並びに皇后官職から第十回太平洋畫會展覽會出品の御買上げがあつた内、水彩畫で御用品となつたのは

宮内省

十一月　八木定祐氏　深山の流　瀧澤靜雄氏
高原の夕立　茨木猪之吉氏　初秋　中林儁氏
柿の木　榎本滋氏　深山の牧場　赤城泰舒氏
初春　武田芳雄氏　秋　磯部忠一氏
穂高山　藤島英輔氏　樣名　故大下藤次郎氏

皇后宮職

夏の湖畔　中川八郎氏　暮れ行く山　大森正行氏
庭の隅　故大下藤次郎氏